



10月号

横浜市立中田小学校

学校だより

第442号



中田小

学校教育目標

さわやか笑顔中田っ子 思い合い ひびきあい
共に生きる力を育てます。

平成29年9月30日

中田小ホームページ

<http://www.edu.city.yokohama.jp/sch/es/nakada/>



『旅愁』

作曲：オードウェイ

作詞：犬童球溪

ふけゆく秋の夜 旅の空の
わびしき思いに ひとり悩む
恋しやふるさと なつかし父母
夢路にたどるは さとの家路
ふけゆく秋の夜 旅の空の
わびしき思いに ひとり悩む

窓うつ嵐に 夢もやぶれ
はるけきかなたに 心まよう
恋しやふるさと なつかし父母
思いに浮かぶは 杜のこずえ
窓うつ嵐に 夢もやぶれ
はるけきかなたに 心まよう



ながら

校長 蒲谷 猛

「映画館をしよう」一言い出しっぺはその時々ですが、予定がそろったときに我が家で度々おこなわれるプチ・イベントです。ソファや座いすをテレビの前に並べ、テーブルにはお菓子やつまみを用意。映画館らしさを出すために、もちろんメインはポップコーン。そのためにいつも買い置きがしてあります。銘々に飲み物をもって席につき、照明を消したら映画鑑賞を始めます。音を立てたりしゃべったりすると叱られます。集中してみんなで観ます。要トイレの申告もタイミングを図って、「一時停止」の許可を取らなければなりません。前回開催時は、『パイレーツ・オブ・カリビアン』を1作目から観て、後日、最新作を本物の「映画館」に行って観ました。『ハリー・ポッター』の最終作公開の前も同じでした。家族みんなで一つの映画を観終わった後に、それぞれの感想を交流するのがまた楽しいです。

ところが、日常の我が家のテレビ事情はこう和やかではありません。理由ははっきりしています。「ながら」ができない私と、「ながら」が自然である他の4人との対立です。音楽が食事中的会話のBGMとして流れていてももちろん平気なのですが、台詞や映像のあるテレビ番組は私にとってはBGMにはなりません。テレビがついていればそちらに集中するので、会話にはのれず「話しかけてるのに」と責められることに。耐えきれなくなって、「テレビを観るのか、話をするのかどちらかにしようよ。」と言ってしまったら、「いいよ。もう話さない。」というおさまりの終焉パターンにはまります。

朝会の時に、全校の皆さんにこんな話をしたことが何回かあります。「水道は、必要なときだけ蛇口をひねって水を出し、必要ないときは締めておくでしょ。おしゃべりもこれと同じ。のべつ幕なし話している人は、蛇口が壊れてしまっているということ。」自分にとっては、テレビもこれと同じです。観たい番組に合わせてテレビをつけ、見終わったら消す。そう育てられてきました。でも、食卓についた息子は、「何か今日いいんとして、暗くね？テレビつけようよ。」と言います。せっかくテレビをつけても、話ばかりして全く観ないのかと思いきや、断片的に

聞こえてくる単語や文章に反応して、関心事だと瞬時に判断するとテレビに集中します。関心度が下がれば、またテレビはBGMとなります。流れている水のなかから、何かをさっとすくっている感じです。

膨大な情報をいつでも大量に手に入れられる現在の子どもたちにとって、「ながら」は必然のスタイルなのでしょうか。同時並行で流れてくる情報のなかから、自分にとって必要な情報を逃さずキャッチする能力には驚かされます。私にはできません。LINEをしながら勉強をする、音楽を聴きながらゲームをする、YOUTUBEを観ながら入浴をする、「ながら」が生活の中にあふれています。気になるものが同時にある状況の継続は、どうしても注意力が散漫になるように私には思えてしまいます。

みなさんは、どう思われますか。「ながら」